「父と二人の九ヶ月」

安木沢　修一（新潟県長岡市・六十八歳）

わが父は、令和五年の五月五日に亡くなりました。九十八才でした。ほんとうに「面白い人物」でした。まるで、兄弟のような父でした。よく喧嘩もしましたが、親子に喧嘩は付きもの。亡くなれば、全てが浄化されるのですが、私の場合、母がその時は施設に入所してまして、父と二人っ切りの期間を十ヶ月近く過ごしました。今から思えば、とても素晴らしき想い出になりました。そして、これも自然な事かもしれませんが、もう少し優しくしておくべきだったと反省をしたりする、愉しくも悲しき日々を、今過ごしております。

そうですネエ・・・いろいろ「想い出」はあるのですが、一番愉しかったのは、私が食べ物を買ってきた時、（父はパンが大好物でした。）ほんとうに嬉しそうな顔をする人でした。その顔をみた時です。父は、必ず誰にも目をしっかりと向けて話す人でした。そして、思っている事を、ハッキリと言う人でした。ただ、スバスバ言う人だったので、反感を買う事もしばしば、ありました。正直で、どこか憎めない人。そんな愉しい父でした。

次に、悲しかった事ですが、亡くなれば人間という者は不思議な

もので、ただ「悲しみ」でなくなるのですね。所謂、さっき云った「浄化」という事だと思いますが、全て長所に感じられるから面白いものです・・・・。さて話を戻すと、やはり眠れなくなり、うつや睡眠薬を多く飲むことでした。最近は（亡くなる数ヶ月前）は、私が管理していました。口にするのは、いつも母の事。介護施設には、随分と電話をしていたようです。そして、去年の暮からは、自分も週一回通っていました。「行きは良い良い。帰りは淋しい」という心境が、まざまざと感じ取れました。母を心より信頼し、愛していた父が、今は、ほんとうに愛（いと）おしい私です。父の二人切りの生活は、きっと母が私達（父と私）に与えてくれたプレゼントだったのかもしれません。よろこびやかなしみは、誰にでもありますが、私にとっては、大げさかもしれませんが、今や「黄金の輝く日々」でした。オヤジさん、ほんとうに有難うございました。あなたは、私の最大の最高の「理解者」でした・・・・。もちろん、その根本は、「情愛」ですが。どうか、天国でまた会う日迄、私（達）を、見守って下さい！安らかに、お眠り下さい。では、さようなら。